＜＜東北魂＞＞を鼓舞する
電子新聞

発行所　株式会社遊無有
〒 207-0005
東京都東大和市高木 3-315-1-2-2
http://www.yumuyu.com/
e-mail:yumuyu@wj8.so-net.ne.jp

# 東北復興

Rising up , TOHOKU !

無料

第 60 号

毎月発行

発行 2017 年（平成 29 年）5 月 16 日 火曜日

2 0 1 7 年（ 平 成 2 9 年 ）5 月 16 日　火 曜 日

## 【当新聞発行責任者兼編集長兼記者紹介】

【砂越　豊】

宮城県生まれ、63 歳、経営コンサルタント、趣味は、縄文文化研究、この 2 月に株式上場プロフェッショナルを養成し、IPO の経営者教育も行うスクール『IPO マスタースクール』を開校、校長就任

# 創刊5周年にあたって思うこと

## 大震災から6年を過ぎた被災者と避難民の方々の心情をあらためて考える

### ちょっとした個人体験

大したドラマがあったわけでもないし、まことに瑣末な体験で披露するのもためらわれるが、筆者の小さな体験から話を始めたい。筆者は、三月下旬の三陸取材から帰宅した直後から、五月の中旬までの約二ヵ月弱の期間、日常生活が部分的に壊れていくプロセスを体験した。

最初は、取材から戻っての体調不良であった。

そのひとつが、取材中にレンタカーに乗りっ放しだったためか、それまでの慢性的腰痛が悪化し、ぎっくり腰になってしまった。かなり重症で、まったく歩けず、とても外には出かけられないほどだった。

そこに風邪を併発した。三週間という期間中、治りかけてはまた悪化するパターンを数度も繰り返した。かなりしつこい風邪であり、同じ風邪病原菌ではないと思われたほどだ。

その間はずっと寝込んでしまい、始終ボーっとして、前向きの思考も出来ず、読書をする気にもなれず、非常に憂うつな日々だった。

自分の身に何か良からぬことが起きているのではないかと疑心暗鬼にもなった。

活動らしいことが何も出来ないので、前から気になっていた、会社員生活に終止符を打った昨年の秋からいままでの半年間を振り返ることにした。

環境の変化、働くことの意味、年齢的な衰え、これから出来ること、やりたいことなどを少し整理した。

それらを冷静に整理できたところで、風邪とぎっくり腰も同時に少し改善したので、少し前向きになれた。そこまでにほぼ一ヵ月を要した。

### 次は情報遮断

しかし、不運はそこで終わらなかった。

不思議なことに、元の日常に戻ろうと決意したその日の夜、今度はPCネットワークが壊れた。電子メールもインターネットも使えない。ネットでのニュース閲覧もできなくなった。

回復を試みるも、ネット関連業者のたらい回しに遭遇してラチがあかない。

ハードの問題と決めつけ、光回線モデムを取替えてもつながらない。

そこで、プロバイダを思い切って切り替えたところ、何とか回復したかに見えたが、今度は電子メールが送信できない。

PCショップとの間を何往復もして原因を突き止めたら、今度はPCのハードディスクが壊れているという。データ完全崩壊の寸前だと判明したのだ。

以前のデータを取り出して保存しつつ、PCを入れ替え、ようやく元の日常に戻れるかと思ったら、今度はSNSとして活用していたフェースブックがトラブルで、アカウント停止となり、ネットワークに入れず、ネットワークの友人たちとの情報交換も出来ず、発信もできない状況となった。

その後、フェースブックマネジメントとのうんざりするやり取りの結果、多少不満はあるが、何とか回復した。ここまでに二週間以上かかった。

その間のイライラと、部分的な情報遮断については思い出したくもない。

### 憂うつから悲観へ

ぎっくり腰としつこい風邪の一ヶ月間はほんとに憂うつだったが、それ以上の感情ではなかった。日ごろの不摂生から来るものだと素直にあきらめられた。

しかし、その後の二週間強の日々は、これでもか、これでもかと襲ってくる不運なトラブルの連続に、生来の楽観主義も大きく毀損した。

狙い撃ちでもされたかのように、何でこうも不運が続くのかと悪態をつきたくなった。忍耐力の限界を試されていた。

わずか二週間だが、情報遮断状態に放置され、タコツボ的な孤立感を抱いた。

短期間とはいえ、日常ルーティンが完全に壊れたことの精神的影響はただごとではなかった。

他人から見れば、笑えるような、小さな不運が重なっただけのことであるが、本人にとってはそうは言っていられない。

とても長く暗いトンネルにいるようであり、次から次と何度も襲ってくるトラブルに対処するだけでも大変なエネルギーが要る。

最も堪えたのは、これら一連のトラブルが、何かもっと悪いことの前兆ではないかという疑念を振り払うことであった。

つまり、もっと悪いことが起きるのではないかという疑念を振り払うのにすごくエネルギーを奪われたことである。

### 被災者・避難者の現在に至るまでの心情

長々と筆者の小さな不運の連続をわざわざ記載したのは、創刊五周年にあたり、これまで、被災者・避難者の心情を分かったうえで新聞を発行してきたのかとふと疑問に思ったからである。物理的な現象としての大震災は理解できても、また、復興の遅れは取り上げても、被災者や避難者の心情をほんとうに理解しようとしてきたのかという反省もした。

筆者の、わずか一ヶ月半の連続トラブルより、はるかに大規模な不幸に見舞われた被災者と避難者の心情を理解しようと努めることはどういったことなんだろうと思い直してみた。

自分の体験からでないと、他人のことは本当には分からないとも思った。

### 遮断・孤立・日常崩壊・世界観自壊・そこから立ち上がるということ

あのとき被災者は、大震災によって、物理的にも精神的にも、それまでは確固として存在してきたと思い込んできた「ありきたりの日常」から突如遮断された。そして電話やラジオを失い、隣近所の相互の情報交換網からも遮断され、物理的にも精神的にも孤立した。

生活するためのあらゆる手段である家や生活道具、食料が失われ、電気や水道やガスも使えず、多くの犠牲者が発生したことで地域の人間関係も崩壊した。

何よりも堪えたのは肉親の喪失であろう。

そうして、「ありきたりの日常」が完全に崩壊したことを何度も何度も思い知らされたのが、この六年間ではなかったか。

時間が経てば、目に見えるものは回復しているように見えるが、心の中は、遮断・孤立・日常崩壊が続いている。

そして、意識するしないにかかわらず、それまでの当たり前の世界観が崩壊する場面に何度も遭遇し、寄るすべを失い、幾度もがく然としたにちがいない。

### 「取り返しがつかない」ということ

前述の筆者の小さな体験など取るに足りない話で、大震災と同列には論じられないが、時間が経てばいつか解決する問題もある。

心と身体が感じる被害の大きさは筆舌に尽くしがたい規模のものであったけれども、それでも、元通りではなくとも、代替のものがいつか出現することで解決する問題である。

しかし、絶対に解決しない問題がある。

肉親の死であり、親しい友人・知人の死である。

それはどうにもならない。元に戻ることは永遠にないのである。

こうして、「取り返しがつかない問題」と「取り返しのつく問題」が、波状攻撃的に多くの被災者・避難者の心を苦しめている。

### 今後どうすればいいか

震災後六年を経過したこれからは、被災者も避難者も、考え方を切り替えるべきだとあえて言いたい。

それは、六年経過した後だからこそ、「取り返しがつかない問題」を、「取り返しのつく問題」から完全に切り離して、真正面から向き合うということである。

あまりに次元の異なる問題を同時かつ同列に扱わないということでもある。

「取り返しがつかない問題」とは、人間の知恵と努力ではどうにもならない次元の事柄であり、最終的には、宗教的な境地でのみ解決できるとしなくてはならないと思うのである。

あの大震災が発生したこととその犠牲発生とは人知を超え、人間にはどうにもならないと思うことである。

それを人間の努力と注意でどうにかなったはずだと思い続けると、永遠に苦しむこととなるだろう

そして、犠牲となった人々を、心安らかに、向こうの世界に見送ることで、解決できない課題を無理やり背負い込んでいる被災者を解放してあげようと思った次第である。

【東北復興】掲載の記事・写真・図表などの無断転載を禁止します。Copyright YUMUYU INC. All rights reserved.

# 三陸の起業家紹介
## カメリア社中代表の佐藤優子さん
## （大船渡の地域総合商社）
## 三陸水産業復興談義で大盛り上がり

大船渡の椿から作った「椿茶」も販売しているカメリア社中

### 三陸酒海鮮会が取り持つご縁

三陸の大船渡や気仙沼の復興支援活動をされているあずさ監査法人の轟さんとは、三陸酒海鮮会でいつもお会いする関係でした。何度かお話しするなかで、いつか大船渡や気仙沼の事業者の方を紹介していただき、復興関連の話をしたいとお願いしておりました。

そんなところに、大船渡の起業家である株式会社カメリア社中の佐藤優子社長と都内で食事をするが、同席しないかとのお誘いがあり、即座に同意して、今回の歓談につながった次第。

会場は、同じく三陸酒海鮮会でお世話になっている蔵石さんが運営されている肉のヒマラヤ・ポルコロ。

### 大船渡談義でスタート

筆者の祖父はたまたま大船渡出身で、まだ親戚もいるという話でスタートしたが、そこから一挙に打ち解けました。

佐藤社長からは、さまざまな復興活動をしている過程で、先輩からの声がけで二年前に起業したこと、それまでは、政治家秘書や事務職しか経験がなく、起業しようと思ってもいなかったこと、ましてや水産業関連で起業しようとはまったく思っていなかったことなどをお聞きしました。

なかなか出来ることではなく、決断力と行動力がある、パワフルな女性起業家でした。

### カメリア社中の業務

事業内容は、地域に根ざした総合商社です。活動エリアは、大船渡はもちろん、気仙沼もテリトリーで、水産物の仲介を主な事業にされています。

取扱い商材については、地元ではほとんど商品価値がないと思われている水産物でもいま注目されているものがあるというお話もいたしました。

たとえば、陸前高田で最近品不足という「ケツブ」や、船底の修理のために厄介ものだった「ムール貝」（しゅうり貝と呼ばれていました）などです。

もっと商品としての再開発が必要との話で一致しました。

また、面白いのは、水産物ばかりではなく、写真にもあるように、地元で製造した「椿茶」や菓子類も販売していることです。

### ホヤPRにタモリ

お酒が進むにつれて、ホヤ談義に移り、当新聞でも何度も取り上げているように、新たなホヤの加工品プロデュースやホヤの干物が大好物だというタモリを広告塔に担ぎ出すことなどをお話しました。

それを覚えていてくれて、帰途、東北新幹線社内で販売していたホヤの干物を撮影して送ってくれました。

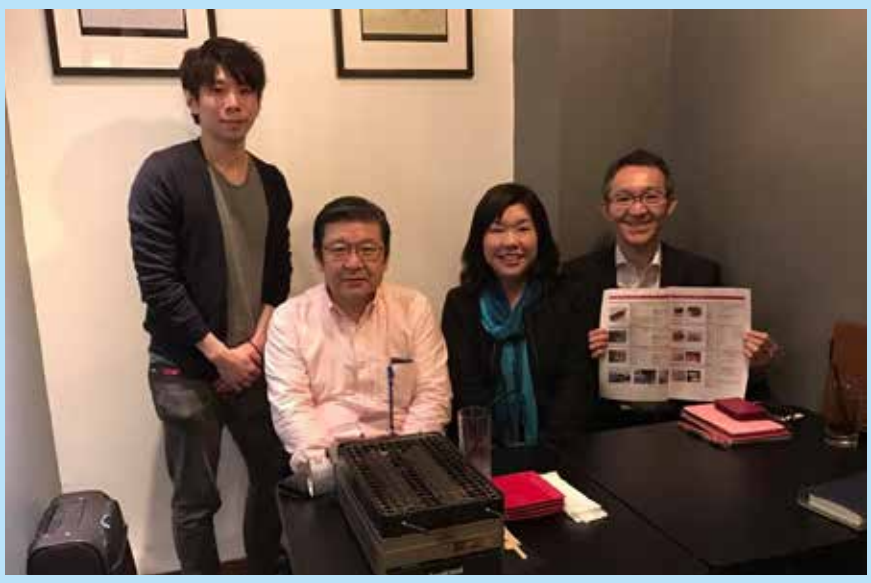
### 東北は世界を目指す

将来の展望として、東京圏を目指すのではなく、一挙に世界を目指してはどうかと提案させてもいただきました。

どうしても地方からの発想では、一度東京圏で有名になり、その後世界へという発想ですが、いきなりの世界進出も考えて欲しいという願いです。

また、新たなビジネスとして、地域の特徴を活かし、地元の祭りなどを取り込んだインバウンド観光事業なども話し合い、楽しい取材となりました。

大船渡の魚（カメリア社中 FB より）


右から、轟さん、佐藤さん、筆者、蔵石さん

大船渡の魚（カメリア社中 FB より）

大船渡のカニ（カメリア社中 FB より）

佐藤さんが帰りの東北新幹線社内で撮ったホヤの干物

【東北復興】掲載の記事・写真・図表などの無断転載を禁止します。Copyright YUMUYU INC. All rights reserved.

# 第 27 回 三陸酒海鮮会 4/22 開催

東北地酒ラインアップ

大人気だった岩手のAKABU

前回の参加人数がすごすぎましたので、今回は少なかったですが、非常に濃い会となりました。

とはいえ、少人数でじっくりお話ができたことはとても良かったです。

また、お酒はすごかったです。最初は、初お目見えの岩手のアカブでしたが大人気となりました。

日本酒は飲んでみないと分からないので、こうした機会はとても重要だと思います。

料理も、これでもかというくらいのラインアップ。

アナゴ鮨もおいしい

豪華すぎる刺身

豪華すぎる刺身、あなごの鮨、他にもお腹いっぱいになるほどの料理で、ほんとに五千円でいいのかというレベルでした。

【完成品】

# 第33回 水産業再興のための料理レシピ紹介

## 《カツオとスナップえんどうのサラダ》

＊マスタードがカツオを食べやすくピリッとさせます。（松本氏）

郷土料理愛好家
松本由美子氏

**一簡単レシピー**

『材料』 <2 人分 >　カツオさく 1/2 本 (200g)、スナップえんどう　6 本、紫玉ねぎ 1/4(50g)、マスタード 小 2、レモン汁・オリーブ油　各大 1、塩　小 1/3

【作り方】

① スナップえんどうは、ヘタを取り熱湯で２分茹でてザルにあげる。あら熱が取れたら斜め半分に切る。

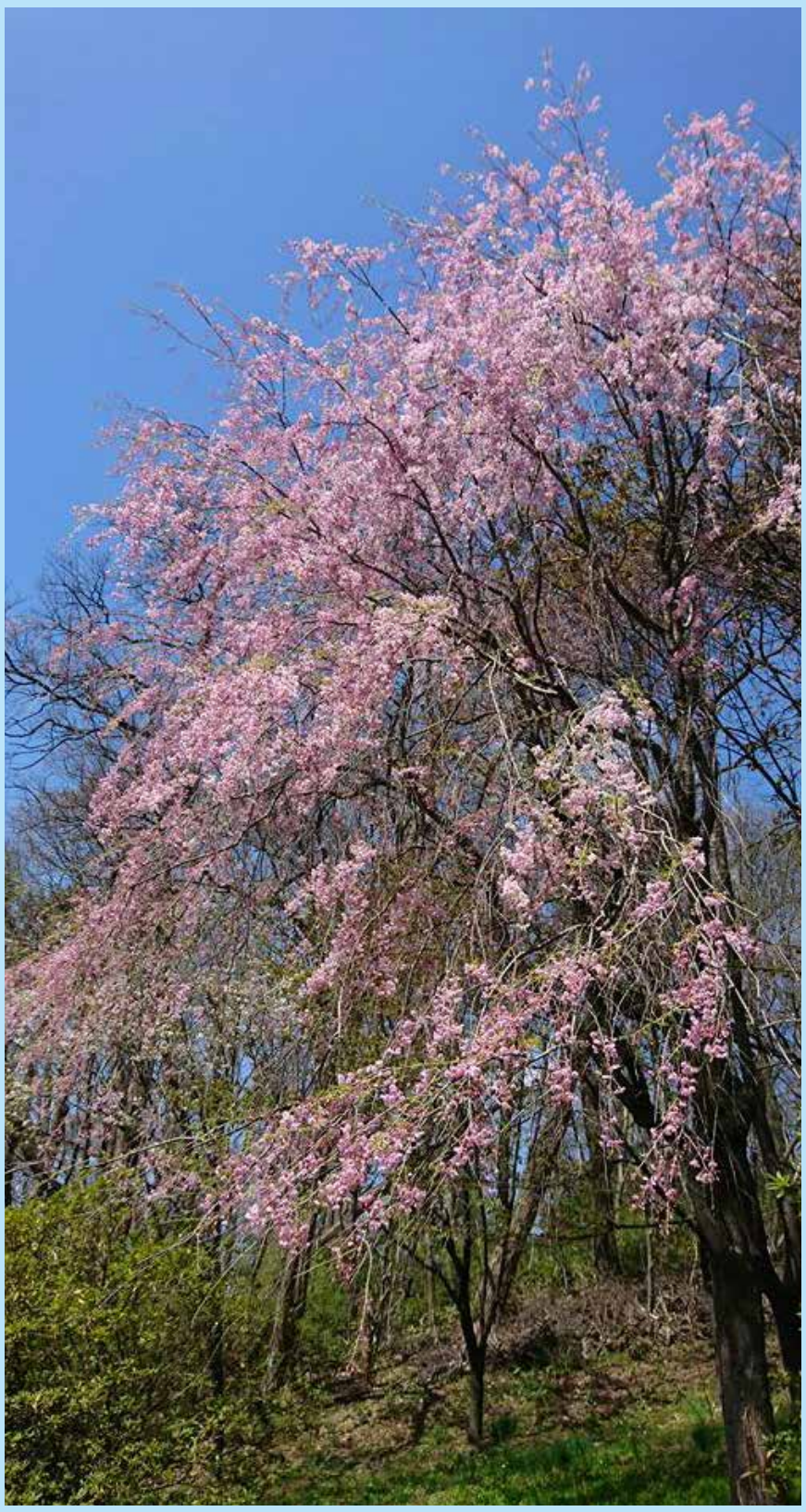
② 紫玉ねぎは繊維に沿って薄切りにし、水にさらす。

③ カツオは 7 ～ 8 ミリ厚さに切る。ボールに調味料をあわせカツオと紫玉ねぎ、スナップえんどうをあえる。器に盛りあらびき黒コショウをふる。

【東北復興】掲載の記事・写真・図表などの無断転載を禁止します。Copyright YUMUYU INC. All rights reserved.

# 写真でお伝えする
# 東北の風景
## （桜と虎舞）

写真撮影：尾崎匠



【東北復興】掲載の記事・写真・図表などの無断転載を禁止します。Copyright YUMUYU INC. All rights reserved.

# 東北でよかった

## 「あっちの方だったからよかった」

今村雅弘氏が復興大臣を辞任した。自身が所属する派閥のパーティーでの講演の中で、「社会資本等の毀損も、いろんな勘定の仕方がございますが、25兆円という数字もあります。これはまだ東北でですね、あっちの方だったから良かった。これがもっと首都圏に近かったりすると、莫大なですね、甚大な被害があったというふうに思っております」と発言したことがきっかけとなった。

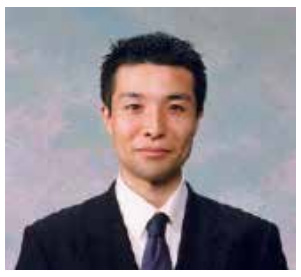
恐らく、被災地が東北だったからこれくらいの被害額で済んだのであって、これが首都圏だったらこんなものでは済まないはずだ、ということを言いたかったのだろう。ただ、それにしても、「まだ東北で、あっちの方だったから良かった」はいかにも余計である。災害が起きたのがどこだったからよかった、どこだったらよくないということはない。どこであっても、災害が起きてよかったということはない。

そして、もう一つ、「あっちの方」という言葉である。むしろ、この言葉の方に今村氏の東北に対するスタンスが表れているのではないかと思った。東北は「あっちの方」、つまり「こっち」じゃない。どこか遠いところ。自分のいる場所とは違うところ。東北に対するそのような今村氏の認識が感じられる言葉である。

今村氏は、「現場主義を徹底し、被災者に寄り添い、司令塔の役割を果たしつつ、被災地の復興に全力を尽くしてまいる決意であります」と就任時の記者会見で述べている。「被災者に寄り添って」と言うが、自分だけ被災者と違うところに身を置いていて、どうやって寄り添うつもりだったのだろう。


### 執筆者紹介

大友浩平
（おおともこうへい）
奥州仙臺の住人。普段は出版社に勤務。東北の人と自然と文化が大好き。趣味は自転車と歌と旅。
「東北ブログ」
http://blog.livedoor.jp/anagma5/



Facebook
https://www.facebook.com/kouhei.ootomo


前復興大臣が東北の復興に対して、全く無関心であったとは思わない。ただ、残念ながら、ご自分の発する言葉に対する感度がそれほど高くない方だったのかもしれない。講演後の記者とのやり取りでも、この発言の何が悪かったのか全く分かっていない様子であった。そこの感度は、今村氏の発言についてその後にすぐさま謝罪した安倍首相とは対照的であった。安倍首相は、「まず冒頭ですね、安倍内閣の今村復興大臣の講演の中におきまして、東北の方々を傷つける、極めて不適切な発言がございましたので、総理大臣としてまずもって、冒頭におわびをさせていただきたいと思う次第でございます」と述べた。恐らくその時点で、「この発言はかばい切れない」と思ったのだろう。

## 「東北でよかった」の劇的転換

さて、そのような今村氏の「東北でよかった」発言とその後の辞表提出を受けて、私はfacebookに、「生まれ、育って、今も生活している場所が『東北でよかった』と、心底私は思ってます。前復興大臣も一度住んでみたらいいと思う。ホントいいところなんだから」と投稿した。日付が変わって4月26日の0時59分のことだった。普段、飲み食いした店の話や参加した会合の模様を発信するのがほとんどの私の投稿の中では異例な感じの投稿だったが、お蔭様でいつもの倍以上の「いいね！」やたくさんのコメントをいただいた。

私の友人も同様に、「僕は生まれたのが『東北で良かった』。音楽を学んだのも『東北で良かった』。僕の街もステキな街だし、死ぬまで東北に住んでいたいぜ。東北の田舎の人たちだから助け合えたし乗り越えられた。東北『が』良かったって言い間違えたんじゃないかな？まあ、関東の爺様の言うことにいちいち腹は立てない。この機会に、みんな東北一度は来て見て」と投稿していた。

一夜明けて、このfacebookの投稿へのコメントで、ツイッターのハッシュタグで「#東北でよかった」がすごいことになっていることを教えてもらった。見てみるとそこには予想だにしなかった投稿が並んでいた。東北の美しい景色や美味しい食べ物の画像、心に残るエピソードなどが、「#東北でよかった」のハッシュタグと共に大量に投稿されていたのである。

どうやら、最初のうちはやはりこの「#東北でよかった」のハッシュタグは、今村氏の発言を批判、非難するものばかりであったらしい。ところがその後、この「#東北でよかった」が、まさに「東北でよかった」という意味で投稿されるように変わり、その意味での投稿が圧倒的な数に上ったのである。なんという鮮やかかつ素敵な切り返しだろう。様々な画像に添えられていたメッセージも印象的なものが多かった。

「#東北でよかった 生まれた場所が」
「#東北でよかった ボクらのふるさとが」
「綺麗な景色 優しい人達 旨い飯…（酒…）生まれた場所が #東北でよかった」
「私の大好きな、愛すべき地方が #東北でよかった」
「2008年から、震災を経て、2014年まで住んだ宮城・仙台は、私にとって第二の故郷。心から #東北で良かった」
「故郷を離れても忘れない。あの町で育ってよかった。#東北でよかった」
「生まれも育ちも、良かったと思える場所だよ。ご飯が美味しい、素朴な人々、のどかな景色。これだけで東北でよかった、なんだよいいとこだよ、東北」
「震災後、東北に5回旅行しました。福島、宮城、山形、青森の地元の人たちはいつもあたたかくみんな親切で、東北に遊びに行って良かったなあと思っています。まだ訪れていない所へも旅しようと思います」
「初めて鉄道目的の旅行で、迷った時、優しいおばあちゃんに教えてもらいました。あの時のことは忘れられない」
「かなしみも よろこびもすべてつつんでくれる #東北でよかった」
「みんな！ #東北でよかったってのは、こういうことを言うんだってことを教えてやろうぜ！」
「失言で終わらせないのは確かにいいな。というわけで、去年の仙台七夕。夏は東北各地で祭りが開催されます。おいでよ東北」
「このハッシュタグがいい意味で使われてトレンドに上がっているのが東北民としては嬉しい。」
「これぞ東北の心意気」
「生まれた場所が #東北でよかった こんなにも強い仲間がいる。おいでよしてる仲間がいる」
「#東北でよかった のタグが素敵な写真でいっぱいで、本当に東北は良いなと思いました」
「ひどい言葉を言われても、ひどい言葉で返さないで、何言ってんの、私たちの住む地の素晴らしさを知ってよって、みんなが笑う、そんな東北でよかった」

東北に住む人、東北に縁のある人、東北に心を寄せてくれている人によるこれらの投稿、本当に素晴らしいとしか言いようがない。

## 復興大臣が今村氏でよかった

そしてまた、これらの東北に関係する人たちによる投稿を見た人たちからも、好意的なコメントがものすごい数投稿されていた。曰く、

「なんて強くて綺麗なタグ…」
「このタグ、なんとなく見てみたら『東北本当にいいところだよ！東北に生まれて良かった！東北に行って良かった！』的なツイートで溢れてたから世界は本当に美しいなおい！ってなった」
「こういう失言を明るく変えていく流れ好きです」
「愛にあふれたタグになっていた」
「すてきな使い方になっていて涙が出た」
「さっそく #東北で良かった という言葉の『良い東北を広げよう』としてるツイートを発見し、心打たれました…」
「みんな東北のハッシュタグが素敵な方に使ってていいなって思った」
「タグが素敵すぎる」
「不適切発言を裏返すこのタグには感動。震災を経験したからこその団結力」
「震災にも負けない人たちを見ることができた」
「このハッシュタグのお陰でほっこりした」
「美しい国。『よかった』って言葉はこう使うのだね。とても素敵な意味に変わってる、このハッシュタグ」
「ステキなタグになって本当に嬉しい　私　関西人だけど、さんさやはねこを踊った事があるんだわ」
「あぁなんて素敵なタグなんでしょう」
「なんだろうこのタグ…目から水滴が…」
「このタグ泣くよ…　東北は行ったことないけど絶対行きたい土地の一つ」
「変な意味を持ったタグを乗っ取ってオラが町自慢の幸せなタグに変えてしまう東北人の図々しさ大好き」
「失言が、#をつけたことで郷土愛に変わった。失言する人がいる一方で、その失言を『東北の魅力を発信するハッシュタグ』にして、東北を盛り上げよう、応援しようとする人もいる。そんな国でよかった。こんなに泣けるハッシュタグは初めて」

このように、「東北でよかった」という言葉が、発せられた時の意味を離れて、一夜のうちに本来の意味を取り戻したことに対する驚きと称賛の声が溢れていた。

この「東北でよかった」発信、同時多発的に起こっているのが興味深い。私のfacebook投稿はこれらツイッターの投稿とは関係なく行ったものだし、友人のも恐らくそうだ。ツイッターだけではなく、インスタグラムでも同様に「#東北でよかった」のハッシュタグでの画像がものすごい数投稿されている。

「東北でよかった」と思っている人がそれだけ多数いて、今村氏の発言が引き金となって、ネットに溢れ出たということだろう。

「東北でよかった」が「東北においでよ」につながっている投稿の多さも特筆に値する。私の投稿も友人の投稿も東北に来てみることを勧めているし、多くのツイッターの投稿も東北の素晴らしい景色や美味しそうな料理の画像を投稿して「東北においでよ」と投稿しているものが多い。

このように「東北でよかった」のハッシュタグで東北に来ることを勧めている東北人に対して、既に「おいでよ族」という称号(？)も与えられている。こんなツイートがあった。

「『東北で良かった』についた悲しいイメージを払拭するかのように、『#東北でよかった』とタグ付けしてTLに流れる東北の生命力の強さを現す光景…… さすが、おいでよ族の民たち」

このツイートに対して、

「そう。我らはおいでよ族の民」

と返している人もいた。

この「おいでよ」という投稿の多さこそ、東北に住んでいる実に多くの人が、自分たちの住んでいる土地に対して愛着を持っていること、誇りを持っていること、心底いいところだと思っていることの何よりの現れであると思う。それが夥しい数の「東北ってこんなにいいところなんだよ、とにかく一度おいでよ」という投稿になっているのである。

最後に。今村氏のあの発言がなかったら、これら東北を巡る数多くの素晴らしい投稿もなかったわけである。誰も言わないが、私はあえて言おう。復興大臣が今村氏でよかった、と。

【東北復興】掲載の記事・写真・図表などの無断転載を禁止します。Copyright YUMUYU INC. All rights reserved.

連載
むかしばなし

## 第四十八話
## 「痛ましき未来の火」

あれほど灼熱の赤に染まっていた、八六二〇型機関車の鉄の肌がみるみる冷めていき、その前後方を一直線に跳ね上がり続けていた小石群も、すっかり大人しく地面に転がっていた。

祝魚・長里ら一行が芭蕉の辻から急ぎ戻ると、客車に残っていた数十人の乗客達が周囲の変化に慄いていた。突如、目前に出現した街の姿に、遂に元の時代へ帰還したのだと一時沸くも、やがてそれが所々彼らが知る場所とは違う、完全に無人の廃墟である事に気づいたのだった。

**奥羽越現像氏紹介**

一九七〇年山形県鶴岡市生。札幌、東京を経て、仙台に移住。市内のケルト音楽サークルに所属し、あちこち出没し演奏する。フィドル（ヴァイオリン）担当。

＊

夜明けが来ても、もはやチャンルーラは、次の人格に入れ替わらなかった。ばかりか、純三を振り返った時、見えなかったはずの眼に光が戻っていたのだった。

「純三さん・・そういう顔だったのね。面白い。」

「呪い・・が解けたのか」

「石になってた姉妹たちも、元通り・・そして私たちは、蜂の姿に戻るでしょうね」

チャンルーラの語ったところによれば、こうだ―

三十人の人格を憑依させてようやく目覚めたイアンパヌは、他人格との同居を拒むようになった。津軽の女王・トヨは魔術で育てた蜂三十匹を人間に変え、これに娘たちの人格を移したのだが、やがてイアンパヌが女王の座を狙いトヨの命を奪おうとしている事が発覚。しかも、宮城野で出会った綾糟に、魔術維持の為の蜜を全て与えてしまった。チャンルーラは再びイアンパヌの身体に戻りその人格を封印する事をトヨに訴えるが、トヨの施した術は、以前とは全く違うものだった・・。

「あの時、イアンパヌは綾糟の元にいた。だから使える術はあれだけだったのね・・トヨ。」

トヨは応えて、言った。

「あの蜜の調合は時間がかかるから、その間に蜂が死んでしまう。だから、あの術しかなかったのよ。」

「えっ？でも私たちの身体は蜂なのよね。この後、私たち蜂に戻ってしまうのでしょう・・」

「いいえ。この術では始め、幽体だけの姿だけど、数百年かけて、イアンパヌの身体の精力を分けてもらって本物の身体になるの。」

唖然とするチャンルーラ。

「時間がかかるのよね。」

トヨが溜息をついた。

芭蕉は夜明けの、東の空を青葉山の頂から見ていた。そして、眼下の河岸段丘の原野に、遥か未来の都・仙臺の幻も・・けれどまだ彼は、石を置かずにいる。自分の持つ石こそが、最後に置かれる、六つ目の石。どこかでそう決めていたのだ。

大空には、まだまだ巨大な佐々木喜善と宮澤賢治の姿が浮かび上がっており、その身体は六つの点からなる結界の範囲内に、未だ収まっていなかった。二人がもう少し縮小した時・・その瞬間を待っている。

「この、結界が完成する直前が、最も怖ろしい。震災前、東京に彼の環状鉄道が敷かれようとした、まさにその時のようにな。」

そう言って背負っていた荷の中の、両手で抱える程の機械の箱と向き合う。

「その鉱石受信機で・・わしらをこの時代さ呼び寄せた、と言っとったなあ。」

壇老人が訊く。

「博覧会第二会場の電気館に設えられたラヂオの鉱石を、宮澤殿の石に換えさせて頂いておりまして。これが汽車と同じく、大天狗の結界上にあり、拙僧の箱と呼び合っておるのです。」

「芭蕉殿も・・生まれた時代さ、還られるのかね。」

「・・皆さんのご帰還を、見届けてからです。」

トヨが言った。

「芭蕉さま。石は、私が置きましょう・・ここは六地点で唯一、大天狗の結界線が通る所。衝撃が大きく、危険です。私の持つ石で、力を緩和できるでしょう」

＊

全身に稲妻が走ったような感覚とともに、石川善助は周囲の世界が切り替わった事に気づいた。目の前に若い女がいて、その肩幅程の切り株を挟み向かい合って座り、年輪の上に各々の石を置いている・・まるで対局でもしているかのよう。

「貴女は・・トヨさんか」

「そう。貴殿・・石川善助さんね。私と共に、都の礎に最後の石を置く者。」

卓上の年輪が水面の波紋のように動き、何かの映像がその下で揺れる。

「見えるわ・・私の、これまでの太古からの過去。そしてこれからの遥かなる未来。私はこの都の統領様に、町の中心で守られる事になるでしょう。それが、貴殿の家なのです。」

国分町の、老舗小間物屋・菅喜。善助の実家の中庭、茶室に似た小屋の中に、幼き善助は二人の少女の姿を見ていた。

「貴女は・・私の家を去った。その後、石川家は衰えたのです。まるで貴女が」

「ああ、石川さん。彼らは、私ではなく、あの娘を連れ去った。探して。あの娘は・・帝の元にいる。」

「えっ！？」

それはどれくらいの時間であったか・・おそらく、ほんの一瞬の事だったのだろう。結界の西と東の果てで、二人が同時に石を置こうとした、その刹那。気がつけば、善助は鞭楯の丘に独り・・辺りには、阿古耶姫が憑依したという少女・若を襲った怪物。その残骸である、骨片群が地表一面、転がっていた。

＊

「見えますか！喜善さん」

「仙臺だ・・間違いない」

巨人達の眼下に、宮城野の原野ではなく、昭和の奥州都市が広がっていた。降りる時代を間違えたか？

「私どもは、急速に縮んでいますね・・果たして、どこへ『着地』するのやら」

巨人・喜善が仙臺城跡に変わった青葉山頂に迫ると、招魂社の裏山に手を振る芭蕉や今純三の姿を認めた。

「芭蕉さん！良かった・・石は置き終わりましたか」

チャンルーラは、ここでお別れだった。喜善の掌が、芭蕉らを掬い上げる。もう身体は透けていない・・再び実体化した二人の足元では、その膝で建物が破壊され始めているのがわかった。

「榴ヶ岡は石川善助殿が置いて下されたようです。今も、おそらくそちらに。」

賢治が東を探すと、確かに旧知の顔が手を振っているのを発見した。

「おお、石川さん・・お久しゅうございますな。」

「宮澤さん、佐々木さんのお嬢さんに危険が及んだので、泰衡様がお連れになった！おそらく北の何処か」

それを聞いた喜善は巨大な身体でぐらりと立ち上がった。未だその背丈は雲にも届くが、遥か北方へ目を凝らしても、娘一人の姿など認められる筈もなかった。

脚にちくちくと痛みを感じ背後を見下ろすと、蟻の群れにも似た軍団が、巨人達に夥しい矢を放っている。

「お二人の身体が結界の内側に収まった・・今こそ、出立の時なのだが」

芭蕉が唇を噛む。その間にも彼らを乗せる喜善の掌がみるみる縮んでいくのがわかった。トヨが叫ぶ。

「私を前線へ降ろして下さい。頼朝を止めます」

「いや、それはいけない」

喜善は指を曲げ、トヨらを守るように包み込む。

軍団は既に榴ヶ岡を越え、機関車・客車が横たわる線路上に迫る。乗客らは遂に到達した、血に飢えた武装集団の影に騒然となった。

その時、空に黄金色に輝く麒麟が再び現れた・・いや、よく見ると金色の翼を持つ黒猫である。その身体だけ、再び犬とも猪ともつかぬ奇怪な姿に変え、トヨが背に飛び乗ると地面へ降りていった。

「軍の棟梁、前に出よ。我こそは邪馬台国総祭司、台与（トヨ）である。」

降り立った女が言い放つ。

八幡山の化け猫が、再びその肌を亜炭に変えて紅黒く怖ろしげに燻らせ始めた。

「通せ。道を開けよ。」

都市を埋め尽くす武者の群れの中から、紅潮した面持ちの大将が現れた。

あれが源頼朝か・・未来から来た人々が、一斉にその顔を見た瞬間だった。

「台与様・・この日をどれ程、夢見た事でござろう」

ダメだ・・今純三は思わず乗り出していた。青葉山で見た、兄・和次郎と山村の少女の幻。トヨを渡してはならない。でも、誰が、誰に？奥州が、帝の国・・日本に？俺たちは一体、何者なのだろう。

トヨが真に女王であるかの如き威厳を帯び、応える。

「さても大仰なる行軍かな。さほどの賊心、この奥州に認められたか・・将軍。」

頼朝の声は、震えていた。この女人こそ、後白河院が、否、代々の帝が捜し求めた永遠の命と力の源。

「新しき世への転換期に、我らはおるのです。何卒、この頼朝と共にこの国を」

その時、一本の矢が風を薙ぎ、前線を横切る。頼朝を一人の側近が庇い、矢はその腕と頸を貫通し止まる。

「頼朝、覚悟！！」

左利きの騎馬武者が、次の矢を番え右手の弓を引き絞って、迫り来る。

「大河太郎、兼任なり！」

違う・・泉三郎、忠衡だ。善助は悟った。幾多の長刀に襲われて馬が倒れ、忠衡は地面へ投げ出された。

「さぶ・・・」

善助が叫びかけたが、その時、忠衡と目が合った。忠衡が、歯を見せて会心の笑みを作り、善助へ贈る。

その兜の上に、小栗十郎重氏の斧が振り下ろされようとした、その時である。

突如幻の都市の空に夜の帳が再来し、ごうん、ごうんという異様な響きが辺り全体を満たした。夜空高く、その場に居合わせる誰も見た事がない、十字型の飛行機らしき物体が、百機を越す大群で浮かんでいる。笛に似た不気味な音とともに無数の黒い点が落下して、地表で爆発、大軍は大混乱に陥った。長里国八郎が戦慄する。

「これは空襲ではないか」

大正期、かの日独戦争で日本もまた中国・青島（チンタオ）で行ったという新時代の戦術・航空爆撃・・だがここは、仙臺だ。有り得ない・・

「未来の・・戦争か？！」

喜善と賢治は思わず地に伏して己の頭を守る。未だ巨体とはいえ、爆弾の衝撃は深刻な脅威である。汽車と乗客らを、二人の巨人が必死で庇う格好となった。

いつの間にか、無人と思われた街に逃げ惑う、市井の人々の姿が認められる。

未来の仙臺は、灰になるのか・・何という、悲惨なる戦争。若き世代の行く末。

「宮澤君」「喜善さん」

二人は、遠い未来の、滅亡した世界の光景を、思い出し、いつしか泣いていた。

はははは・・地獄絵図のような、破壊と轟音の中、女の高笑いが聞こえ、誰もが我が耳を疑った。トヨが振り返ると、客車の上に女が一人、仁王立ちしている。

イアンパヌだった。

「見た？トヨ。これが、私の力よ。この国は、そしてトヨは決して渡さない！」

トヨは驚き、笑って返す。

「わかってる・・私は最初から。奥羽を任せられるのは、イアンパヌだけだって事をね。」

―次回予告―

頼朝・・それでも奥州行きますか？そして泰衡・・若を返してくれますか（攫ってない！）次回、今度こそ大団円＋最終回！なのか？

【東北復興】掲載の記事・写真・図表などの無断転載を禁止します。Copyright YUMUYU INC. All rights reserved.

# シリーズ 遠野の自然

## 「遠野の立夏」

### 遠野 1000 景より

暦の上では「立夏」であるが、最近の気温は、まるで真夏になったのかと思わせるほどの暑さである。

その前は、なかなか春が来ず、肌寒いと感じるほどの気温だったので、あまりの変わりように身体がついていけない。衣服の選択にも困る変化である。

そして、こうした天候の揺さぶりが堪える年齢になってきたのを感じる。

遠野も、少し前の冬の名残を感じる季節から、一挙に花々の開花の時期に移行した。

ヤマザクラも、モクレンも、ヒュウガミズキも、クロッカスも、カタクリも一斉に咲いた。

特にクロッカスとカタクリの鮮やかな紫色が目に染み込んでくる。

SL銀河が煙を吐きながら走る姿の背景の山々にはまだうっすらと雪が残っている。

SL銀河試運転　平倉　足ヶ瀬間

SL 銀河試験走行　青笹　岩手上郷間

クロッカス

モクレン

SL 銀河と菜の花畑

ヒュウガミズキ

カタクリ

オオヤマザクラ

【東北復興】掲載の記事・写真・図表などの無断転載を禁止します。Copyright YUMUYU INC. All rights reserved.

# 事業企画提案！
# 『東北んめえもん開発』
## “んめえもん”を東北内で独占せずに高付加価値化で販売

### 東北の埋もれた食材

これまでのあらゆる食材を通じた復興支援活動を概観すると、東北には多くの埋もれた食材があることが分かってきた。

また、日本酒は食材とはいえないが、埋もれていた東北の日本酒にも大分人気が出てきて、国内に浸透してきたといえるのではないか。

東北ではありふれた食材なので、地元ではあまり価値を認めていない食材でも、大都市圏では一転して注目されるケースも散見される。あるいは、東北では食材としても認められず、むしろ厄介者扱いされている食材が、少しずつ注目され始めるケースもある。

### 三陸酒海鮮会開催で分かったこと

三陸の海鮮と東北の日本酒を、東京に居ながらにして飲み食いして、間接的に復興を支援しようという『三陸酒海鮮会』を、足掛け五年に亘り継続開催してきて分かったことがある。

それは、東北には「んめえもん」がたくさんあって、そのほとんどが、これまで、東京圏に住む人たちにはまったく知られてこなかったのである。

一部の東北の日本酒は最近では少し有名になってきたが、それでもまだ名の知れた日本酒以外はほとんど知られていない。

そのため、毎回、提供する銘柄を入れ替えると、新顔の日本酒をうまい、うまいと引っ張りだこになる。そうやってどんどんファンが増えているのは確かである。

海鮮などはもっとひどくて、ほとんど知られていない。ましてや果物や野菜類はほとんど知られていない。

それどころか、明太子などは、東北や北海道産の素材なのに九州産であると誤解を受けているものもある。そうした食材や日本酒を実際に提供して食してみる機会、飲んでみる機会を設定すれば、そのうまさが分かるし、すぐにもファンが増えるだろう。

食べて、飲んでみなければ、食材や飲み物は分からない。提供する機会の有無がどれほど重要かということである。

しかし、残念ながら、そうした機会に恵まれなかった食材や日本酒は、地元以外には永遠に知られずにいるままなのである。

### 東北人は「んめえもん」を独占してきた

よく、東北人は商売が下手だとか、宣伝が下手であるといわれてきた。

最近、筆者はそうした見方は間違っているのではないかと思い始めている。

つまり、東北にしかない「んめえもん」は、他所に出さずに、東北人だけで、東北内で独占してきたのではないか、そしていまでもそうではないかということである。

よそ者には、うまさが分かってたまるか、簡単に分からせてたまるかという気持ちが無意識のなかに潜んでいるのではないか。

だから、積極的に他所には知らせて来なかったし、販売もして来なかったのではないか。

### 「ホヤ」PR作戦欠落

ホヤは韓国の消費が落ちている為、抱えていたホヤ在庫を大量に破棄したことがある。ニュースにもなった。

幼少時からのホヤファンとしては、情けなく、悔しい思いでいっぱいだ。

韓国に輸出する前に、国内消費を増やそうとは思わなかったようである。挑戦する以前にあきらめてしまっている。

確かに扱いにくい食材ではあるが、おいしく食べるための方法をPRするなり、加工して鮮度問題を回避するなどの手立てはあるはずだ。

そうした工夫がなされていないのが残念でならない。

### 陸前高田の「毛ツブ」

最近、陸前高田市の「毛ツブ」が注目を浴びている。

これまで地元では見向きもされなかったが、あるTV番組で取り上げられてから、一挙に品薄となったようだ。

陸前高田市では、産地の広田湾にちなんで「広田つぶ」というブランドにして売り出そうと計画中であるという。

さらに人気が出ることを祈りたい。

### もうかさめの心臓刺身

三陸酒海鮮会でも、「もうかさめ」の心臓の和え物を出したことがある。

日本酒党ならアテに最高である。レバ刺しのような食感でお酒もどんどん進むことまちがいない。

普通より小型の毛ツブ

気仙沼といえばフカヒレだけというのは古い。もっと鮫のさまざまな部位を活用して、新しい食材開発を積極的に行うべきと思う。

### 仙台の「せり鍋」

仙台といえば「牛タン」が有名だ。ずんだ餅も最近全国的に知られてきた。

しかし、地元ではさらに人気があるのが「せり鍋」であるという。

人気店では予約するのも大変らしい。

残念ながら筆者は「せり鍋」は食していないが、「せりのおひたし」を初めて食べて、ファンになった。

せりの根まで洗って食べるのが特徴だ。しゃきしゃきした食感がとてもいい。

あまりのせり鍋人気で、せりが不足しているという。

ホヤの干物

せり

東京圏ではまだ注目されていない。

### 「東北んめえもん開発」

こうして見てくると、やはり東北には「んめえもん」がたくさんあるようだ。

そして筆者の予測が正しければ、東北人たちは、それを独り占めにして、よそ者には食べさせない、飲ませまいとしているのかもしれない。

どうしても食べたい、飲みたければ、仲間に入るしかないと・・・。

筆者としては、その先回りをして、東北人も気がついていない食材の開発をやってみたいと思っている。

素材提供だけに止まらず、食材に加工を加え、全国的に最低ランクの付加価値率を大幅に引き上げて、出来れば、東北内で独り占めせずに広く販売したいと思っている。出来れば海外まで視野に入れて。

そのための協力者の出現を待ちたい。どうぞ遠慮なくお問い合わせを願いたいと思う。

せり鍋

もうかさめの心臓の刺身

【東北復興】掲載の記事・写真・図表などの無断転載を禁止します。Copyright YUMUYU INC. All rights reserved.